

建学の精神に支えられる「無形資産」

西中 利也

学校法人名古屋学院大学理事長

1980年3月、私は名古屋学院大学を卒業し、同年4月、再び母校の扉を叩き入職した。以来約45年の間、事務局長、常任理事を経て、昨年8月に理事長に就任した。

名古屋学院大学は1964年に開学し、昨年度、大学創立60周年を迎えた。前身は、アメリカ人キリスト教宣教師、F.C.クライン博士が1887年に設立した名古屋英和学校であり、創始者が掲げた「敬神愛人」が本学の建学の精神として脈々と生き続けている。敬神愛人の「敬神」は“Fear God”と英語表記され、「敬う」より、「畏怖する」ことを表し、人間の知識や経験に驕ることなく、「謙虚に学び続ける」ことの大切さを説いている。また、「愛人」は隣人に対する無償の愛の重要性を教えている。

本学の60年の歩みは平坦なものではなかつた。開学時こそ順風満帆な船出であったが、開学間もなく財務危機が顕在化した。本学は、「部門別責任制」を大学構成員の総意により敢行し、10年以上の歳月を経てこの困難を乗り越えた。こ

の辛い経験は、大学全体、特に教職員に常に問題意識を持ち、危機を自分事として受け止め、自律的に行動するマインドを醸成した。そして、この基礎となつたのが、「謙虚に学び続ける」とを説いた建学の精神であつた。

その後2000年初頭には、18歳人口急減の影響を受け、入学志願者数がピーク時の20%程度まで減少した。他に先んじて、良好な教育研究環境を実現した本学であつたが、立地に起因するハンデは大きかつた。再度の経営危機に際し、本学は20年ぶりの都心回帰を決断した。意思決定から開設まで4年以上を要し、法人本部を含む複数学部の移転の費用負担は軽いものではなかつたが、経費の削減、給与の見直し等を実行し、実現にこぎつけた。このことは、教職員の理解と協力なしには実行できなかつたことであり、開学当初の大きな試練を総力で乗り越えた経験と意識があつて実現できたものと考えている。

また、時期を同じくして離籍者の増加が大き

な問題となつた。この問題の解決に当たり根底をなしたのは、私たちにとって最も大切な隣人である「学生に寄り添う」ことであり、教職員全体で真剣に考え、行動した結果、離籍者数を減少させることに成功した。「学生に寄り添う」姿勢は、その後も継承され、「学生と教職員の距離が近い大学」としての評価をいただいている。そしてこれもまた、建学の精神の教えである「隣人愛」の実践によりなされた業である。

建学の精神は、教育理念であり、同時に本学運営においても重要な教えでもある。そして、「敬神愛人」の教えから学び、危機を乗り越えて醸成した「無形資産」は本学のレジリエンスとして継承されるものである。

私は、本学に導かれ、歩みを共にしてきた。私立大学を取り巻く状況がますます厳しさを増していく中でのかじ取りを託された今、母校でもある本学に報いることは、「恩返し」ではなく、「ペイフォワード（恩送り）」として、授かつた教え、善意や恩をさらに良きものに発展させ、次

の世代に受け継いでいくものと考えている。

現在本学は、9学部9学科に6200名を超える学生が学ぶ中規模大学として円滑に運営されているが、今後、大学を取り巻く状況は、向かい風ばかりである。厳しい条件下ではあるが、「敬神愛人」の建学の精神と、それに導かれ醸成された「無形資産」を力強い両翼として、向かい風を揚力に変えるべく、尽力したい。

最後に、苦難の克服に尽力された先人が、「名古屋学院大学20年史」の発刊に寄せた聖句を紹介する。

「涙と共に種まく者は喜びと共に刈りとらん」

（詩編126編より）